



【住 所】鹿児島県鹿児島市鴨池新町11-23 【病院長】宇都宮 興 先生

【病床数】280床(一般240床、精神40床)

【内視鏡検査・治療総数】(平成20年度)上部消化管内視鏡検査5,216件、下部消化管内視鏡検査835件、腹部エコー4,748件、ERCP 245件、胃粘膜切除術44件(うちESD 29件)、食道粘膜切除術19件、大腸ポリペクトミー134件、胃瘻造設術58件、胃瘻交換173件、EIS、EVL 16件、食道拡張術8件、内視鏡的止血術37件、イレウスチューブ挿入9件

【スタッフ】医師13名(常勤4名、非常勤9名)、コメディカル12名(看護師8名、内視鏡検査技師3名、医局秘書1名を含む)

【保有機器】内視鏡光源6台、上部用内視鏡13本、下部用内視鏡5本、十二指腸用内視鏡3本、超音波内視鏡1台(上部用ラジアルタイプ1本、ミニチュアプローブ2本、IDUS 1本)、高周波発生装置2台、洗浄機6台

## 最先端の設備と優れたチームワークで 患者満足度の高い最適の内視鏡診療を提供

### 鹿児島県初のER型救急を擁する 地域密着型の内科専門病院として発展

今村病院分院は、鹿児島市内の官庁街である鴨池新町に位置し、病床数280を有する地域密着型の内科系専門病院として発展してきました。平成13年には、軽症から重症まですべての患者様に対して救急医が診療するER型救急を鹿児島県で初めて立ち上げ、24時間体制の内科救急を年中無休で地域に提供しています。平成20年には、さらなる病院機能強化を目的に、脳卒中センターと画像センターを新たに開設し、脳出血や脳梗塞に対して専門医の診療や手術が行える体制を整えました。本院や地域の他施設との緊密な連携を通じて、同院では急性期、回復期、介護まで、地域のニーズに応えた総合的な医療の提供を実践しています。



消化器内科主任部長  
高崎 能久 先生



広い内視鏡治療室



パーテーションで区切られた  
リカバリールーム



個室化された検査・治療室

### 安全で安楽な内視鏡診療を目指して 機能性に優れた内視鏡センターを開設

消化器内視鏡センターは、平成20年の脳卒中センター、画像センターの開設に伴う新病棟建設に伴い新しくオープンしました。総床面積は約840m<sup>2</sup>を有し、その広いスペースの中に検査室、X線TV室、内視鏡治療室、内視鏡洗浄室、リカバリールーム等が、最新の設備と効率的な導線を考慮して配置されています。

消化器内科主任部長の高崎能久先生に同センターの特長を伺ったところ、「内視鏡センターを新設するときに最も重視したのは、安全性と患者様のプライバシーです。まず安全性については、各検査室、治療室の機器類を吊り下げ型とし、床面をすっきりさせることで機器の転倒やコード類の引っ掛けといったリスクを排除しました。また、あらゆる事態に対応できるようにするために、各部屋は広いスペースを確保し、スタッフがスムーズに動けるよう配慮しました。近年の内視鏡治療は複雑でリスクも高いことから、多くのスタッフが万全の体制で臨むチーム医療が中心となっています。そのため、特に内視鏡治療室には通常の内視鏡室の倍以上のスペースを割き、処置具等を間違いなく迅速に準備できるよう大型の収納棚も設置しました」とご説明いただきました。患者様のプライバシーの観点からは、「各部屋は全て壁で完全にセパレートして個室化し、リラックスして検査や治療を受けていただけるように配慮しました。また、当院ではほとんどの患者様がセデーション下で苦痛の少ない検査を受診されていますので、パーテーションで区切られたリカバリールームに15台のソファを配置し、周りを気にせずゆっくりお休みいただくようにしております」とご説明いただきました。リカバリールームには5台の患者モニターと、また全室にナースコールが設置されており、体調不良時には内視鏡受付へ連絡できるよう配慮されているそうです。



## ● 幅広い疾患の知識を有した経験豊富なスタッフが複雑化・高度化する内視鏡診療を支える

消化器内視鏡センターでは、4名の常勤医と9名の非常勤医という限られた人員で年間5,000件を超える内視鏡検査を行っていますが、単なるスクリーニング検査ではなく精査・治療に重きをおいて運営されているため、ESDやERCP等のリスクの高い治療内視鏡も積極的に行なっています。安全を最大限に確保するためにESDはCO<sub>2</sub>送気で行い、術前にはその症例と類似の症例動画をインターネットやDVDで探して学習し、しっかりイメージトレーニングをした上で症例に望むようにしているそうです。また、同院では脳卒中センターを併設していることから、内視鏡センターでも胃瘻造設や交換についても積極的に取り組んでいます。胃瘻患者は術後に自宅介護される方も多いため、栄養剤の投与方法や器具の取り扱いについて、入院期間中に患者様やご家族に実際にやってみてもらい、きめ細かな指導をしているそうです。同センターで胃瘻を造設した患者様はデータベースに登録して管理し、物品の準備なども含めてスムーズに交換できるよう心がけているため、周辺施設や患者様ご家族からの信頼も厚く、紹介件数も年々増加しているそうです。

このように、少数精鋭の医師で多くの検査や高度な内視鏡診療を実践している内視鏡センターですが、これを全面的に支えているのが経験豊富な看護師、内視鏡検査技師などのコメディカルスタッフです。必要な機器・処置具の準備を迅速かつ適切に行なうことはもちろん、治療内容の記録や管理に至るまで、幅広い知識と決め細やかな気遣いで多忙な医師をサポートしています。このようなスタッフの高いレベルを維持するため、同院では内視鏡検査技師の資格を取得したスタッフの異動は極力制限され、より専門的な知識を深めスキルを高められる環境が整えているそうです。また、本院と合同で行う年2回の「消化器疾患を見つめる会」には、医師だけでなくスタッフ全員が一緒に参加し、消化器疾患全般に関する幅広い知識を習得しています。高崎先生は、「これから行う検査や治療の目的をスタッフが理解することは非常に大切です。なぜその治療が必要なのかをしっかりと認識していれば、患者様に対しても自信を持って、温かい雰囲気の中でコミュニケーションをとることができます。また、医師は常に専門用語などを多用して診療を行なっていますが、我々はなるべく手技中も患者様に説

明するのと同じように、一般的な語彙を用いてスタッフに説明するよう気をつけています」とお話になりました。このような相互協力があつてこそ、質の高いチーム医療が実践できていることが伺えました。

## ● 内視鏡の洗浄・消毒の履歴管理をシステム化し徹底した感染管理を実現

今村病院分院は、平成21年12月に病院機能評価のVer.6.0を受審しましたが、内視鏡センターは開設前からそれを前提に設計されており、特に感染管理とリスクマネージメントには力を入れています。使用した内視鏡は日本消化器内視鏡技師会のガイドラインに沿って洗浄・消毒を行い、洗浄・消毒の履歴についても専用の機材を導入して機械的に管理しています。内視鏡処置具については、ディスポーザブル化が可能なものについては全てディスポーザブル製品を導入し、それ以外は超音波洗浄・オートクレーブ滅菌を施して再使用しています。また、月に一度ICT(感染制御チーム)がサーベイランスを実施し、院内全体で感染対策に万全を期しています。高崎先生は、「病院機能評価はお墨付きをもらうためのものではなく、患者様に提供する医療の質を更に向上させるための手段だと考えています。ですから我々は、病院機能評価の項目に挙げられているものは全て真剣に取り組むべきものだと捉え、感染管理もその一環として確実に実施しています」とお話になりました。高崎先生には、「今後は内視鏡センターの実績を積んで医師の充実を図り、同院の特色である救急医療に対しても内視鏡センターとしてもっと貢献していきたい」と、今後の抱負についても語っていただきました。



内視鏡検査技師  
中村 志麻 さん



インフェクションコントロール  
コーディネーター  
吉森 みゆき さん



内視鏡センターの皆さん